

関東地方における縄文時代前期の拠点集落の消長と貯蔵穴の関係

—前期後半を中心として—

松田 光太郎

はじめに

縄文時代の集落の変遷上、縄文時代前期前葉から中葉にかけては集落が隆盛し、居住施設を中心とし、ある程度の施設を備えた一定の形をもつ定形的集落が出現すると共に、墓壙が集中する墓域が形成されると評価された(鈴木1988:4-16)。また一定の形をもつ環状集落は関東・中部地方を中心に早期末葉に出現し、前期初頭から前期後葉へ連続するが、これらは「初期環状集落」と呼ばれている(谷口2004:179-206)。環状集落に墓域が取り入れられるのは前期初頭から始まり、前期中葉・後葉に多くの墓壙からなる墓域が形成されるようになる(谷口前掲)。墓壙への副葬品にも変化が見られ、前期初頭から前期中葉の黒浜式期古段階にかけては石製塊状耳飾・玉類・石匙類が副葬されるが、黒浜式期新段階以降、浅鉢形土器が副葬品に加わる(松田1998:49-70)。

この前期後半(前期中葉～末葉)、放射性炭素年代で6050calBP～5470calBP頃(小林2008:257-269)は縄文海進の高海水準期の末期に相当する時期で(遠藤他2022)、この期間に海面低下イベントの存在を想定する考えがある(工藤2012)。奥東京湾沿岸の大宮台地では貝塚数が次第に減り、東京湾西岸の多摩川・鶴見川流域に貝塚密集地帯が移り、さらにそれが消滅する時期にも当たっている(松田2006:1-36)。

前期中葉の黒浜式期新段階～前期末葉の十三菩提式期、関東地方全域において、環状集落を含む拠点集落がどのようなあり方をしているのかを解明することが本論の第1の目的である。そして該期に想定される自然環境の変化と貯蔵穴の存在状況に焦点を当て、該期の拠点集落の動向を、環境適応戦略の観点から解釈するのが本論の第2の目的である。

1 前期後半の集落の分類とその特徴

(1) 住居址の分布に基づく集落の分類

該期の集落は拠点集落と非拠点集落に分けることができる。拠点集落は集落の規模が中規模以上のものをさす。当時、集落は単独での存続は難しく、周辺他集落との関係をもちながら存在したと思われるが、その際、人や物や情報の交流の拠点となり、またその地域における集落の変遷上、拠点的位置を担ったと考えられる集落遺跡を言う。一方非拠点集落は集落の規模が零細なもので、上記の意味から拠点になりえない集落遺跡をさす。本論では拠点集落の動向の把握を試みるが、縄文時代前期においては住居軒数がそれほど多くない。本論では、拠点集落は土器型式の同一細分段階に属する住居址が概ね3軒以上のもの、非拠点集落は住居址が2軒以下のものとして分析を進めることにする。

さらに拠点集落は継続的拠点集落と短期的拠点集落に分けることができる。本論の分析では継続的拠点集落は土器型式の細分単位にして1時期ではなく、2時期以上継続が認められる拠点集落とした。短期的拠点集落は同単位にして1時期しかなく、時間的継続が認められない集落遺跡とした。

このように継続的拠点集落を定義すると、継続的拠点集落は住居址が環状に巡る環状集落とそうでない非環状集落に大別できる。環状集落について見てみると、住居址の軒数が多くないため、住居の跡の配置は、縄文時代中期の環状集落のような連続した環にはならない。ここで言う環状集落は、該期の累積した住居址を繋ぐと環状ラインが想定できるという程度のものである。また住居址が弧状に配置され、その向い側に住居址群が存在するものも含めることにする。環状ラインの内側、あるいは弧状に配置される住居址群とその向い側の住居址群に挟まれた内側(中央部)には住居空白地(中央広場)が存在する。

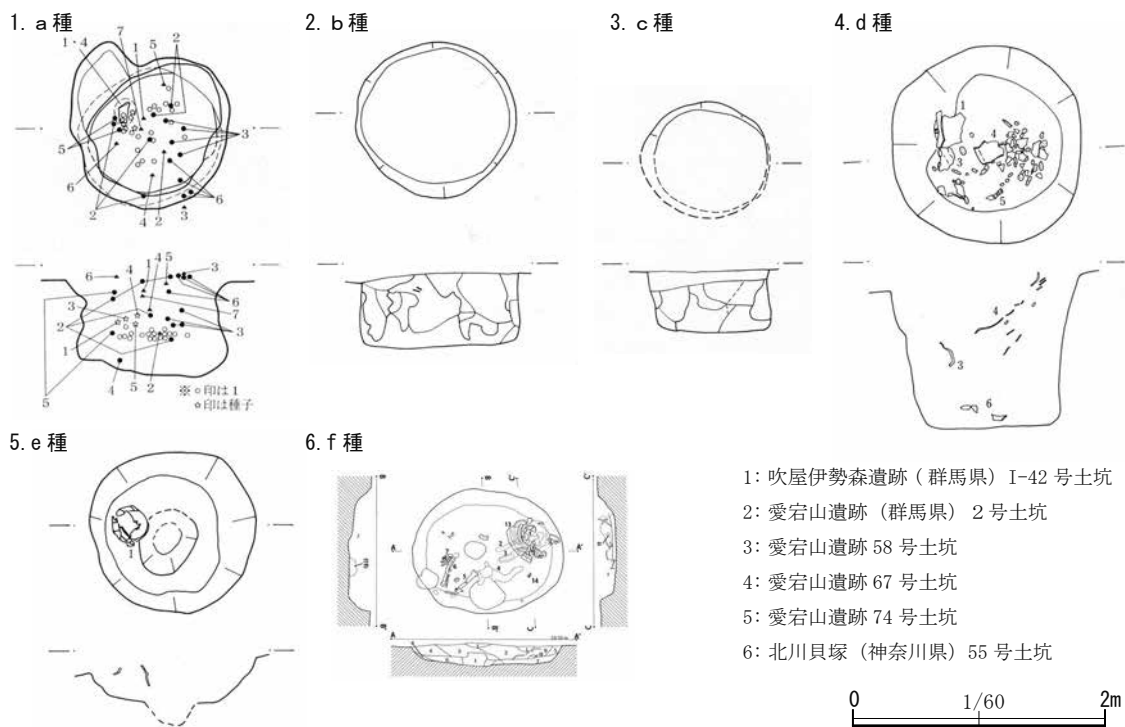
また住居空白地を取り囲むように住居址が分布するが、住居址の分布が環状をなすか判断が難しいものを準環状集落(A'類)とした。これには住居址が弧状に配置され、その向い側に住居址が1軒しか存在しないもの、2列の列状に分布する住居址群が住居址の空白地を挟んで存在するものが該当する。このうち前者は向い側の住居址がない時期は、後述する非環状集落の住居址が弧状分布をなすものと区別が難しい。

一方非環状集落(B類)は住居址が弧状分布をなすもの、列状分布をなすものや、塊状に集中するものなどがある。しかし住居址が散在し、その分布に規則性を見出しにくいものが多い。

(2) 土坑の分類

集落によっては集落内に土坑が存在するものがある。土坑には貯蔵穴や墓壇と考えられるものがあるため、土坑を分類することにする(第1図)。

- a種：平面形が円形をなし、底面が平らで、断面形がフラスコ状又は袋状にオーバーハングするもの
- b種：平面形が直径1m以上の円形をなし、底面が平らで、断面形が円筒状をなすもの
- c種：平面形が直径1m未満の円形をなし、底面が平らで、断面形が円筒状をなすもの
- d種：平面形が円形をなし、底面が平らで、断面形が逆台形状をなすもの
- e種：平面形が円形をなし、底面が湾曲するもの
- f種：平面形が楕円形ないしは長方形をなすもの



第1図 土坑分類図

土坑 a 種・b 種は底面が平らで、容量が大きく、上部で蓋をすることができるため、貯蔵穴と考えられる。実際種実の出土例があり、坂口隆氏も同様の基準で貯蔵穴を定義している。a 種・b 種に稀に副葬品を有するものがあるが、これは貯蔵穴の墓壇への転用と思われる。一方土坑 e 種・f 種は貯蔵穴とは違いが大きく、墓壇と考える。実際神奈川県北川貝塚では f 種の土坑から埋葬人骨が検出されている(第 1 図 6)。土坑 c 種・d 種は貯蔵穴か墓壇か判断がつかず、性格不明土坑とする。群馬県愛宕山遺跡では土坑 d 種からクルミが出土している一方、埼玉県天神前遺跡では土坑 d 種から埋葬人骨が検出されている。d 種の中には底面に段差を有するものがあり、千葉県南羽鳥中岫遺跡で有段土坑(松田1997)とされたものもあるが、d 種に含めた。

以上のように集落と土坑を分類してみた。前期の墓壇の中には特定の場所に群集し、墓域をなすものがある。そこで集落の分類と土坑の分類を組合せると、前期の継続的拠点集落を次のように分類することができる。

- 環状集落 1 類(第 1・2・4 表の A1)：環状集落で、中央の住居空白地に墓壇が群集する墓域をもつもの
- 環状集落 2 類(同 A2)：環状集落で、中央の住居空白地に墓壇が群集する墓域をもたないもの
- 準環状集落 1 類(同 A'1)：準環状集落で、中央の住居空白地に墓壇が群集する墓域をもつもの
- 準環状集落 2 類(同 A'2)：準環状集落で、中央の住居空白地に墓壇が群集する墓域をもたないもの
- 非環状集落(同 B)

現在、非環状集落で墓壇が群集する墓域が共存する明確な例はない。千葉県飯山満東遺跡は住居址の切り合いがないため、本類に該当する可能性があるが、同遺跡には未掘部分があり、集落の構造が捉えられないので、保留としておく。また群馬県大上遺跡は非環状集落であり、かつ墓壇群からなる墓域があるが、住居址の時期は諸磯 b・c 式期、墓域の時期は五領ヶ台式期なので、住居址と墓域は異時期である。

この他調査域に欠落があるなどして、墓域の有無が確認できないものもある。

(3) 集落の特徴

ここでは関東地方に所在する前期中葉の黒浜式期新段階から前期末葉の十三菩提式期新段階の時期に属する継続的拠点集落と思われる遺跡を抽出し、その特徴を見てみる。地域は関東地方南西部、関東地方東部、関東地方北西部に分け、地域別の表に列記した(第 1・2・4 表)。表中の土器型式の時期やその併行関係は(松田2002:47-50・2020)の土器細分段階をもとにし、土器の細分段階を 2～3 段階まとめて時期区分とし、前後の黒浜式期古・中段階、五領ヶ台式期も一括して存在を表記した。なお松田の諸磯 c 式土器新 1 段階は今村啓爾氏の群馬 C (古段階)に相当する(今村2000:93-128)⁽¹⁾。住居の欄の数字は住居址の軒数をさす。細分段階 2～3 段階まとめて 1 時期としたため、実際には一時期の住居数はこの数字より少なくなる。その一方、詳細時期不明としたものは上記の細分段階が特定できないものである。諸磯 a 式期や諸磯 b 式期といった包括的な時期比定しかできないものも含んでいる。この詳細時期不明とした住居は本来的にはいずれかの細分段階の時期に帰属する可能性があるものであり、それを考慮すると、一時期の住居数はこの表中の数字より増えることになる。黒浜式期古・中段階、五領ヶ台式期の住居址数が多い遺跡があるが、これは時期を一括していることもあり、黒浜式期新段階～十三菩提式新段階の住居址数とは同一には比較できない。

また住居の下に土坑の存在状況を示した。土坑の存在状況は土坑を先の基準により貯蔵穴(土坑 a・b 種)、不明のもの(土坑 c・d 種)、墓壇(土坑 e・f 種)に分けた上、それぞれの存在数を◎: 5 基以上、○: 1～4 基、

空欄：0基で示した。ここに記したのはあくまで検出数であり、数が多いからと言って必ずしも群集をさすものではない。また同欄に「種」とあるのは炭化種実の出土を、「副」とあるのは副葬品の出土を、「人」とあるのは埋葬人骨の出土を示した。なおここでいう副葬品は倒置土器、完形ないしは完形に近い浅鉢、球状耳飾、石匙(石槍を含む)をさす。以下、地域毎の傾向を見てみる。

① 関東地方南西部(第1表、第2図)

A. 集落の形態

継続的拠点集落としては環状集落が圧倒的に多い。その殆どは、環状集落中央の住居空白地に墓壇が群集する墓域をもつ環状集落1類(第1表A1)である。西ノ谷遺跡は遺跡内に土取がなされているため、明確な墓壇は少ないが、墓壇と考えられる土坑は環状集落の内側にもあるため、本来的には環状集落1類(A1類)と考えられる。なお南堀貝塚は環状集落1類の可能性が高いが、副葬品を伴う明確な墓壇が僅少なため、環状集落1類(A1類)か環状集落2類(A2類)かの判別は行わなかった。環状集落では集落を構成する住居址の軒数が多く、集落内の住居址の分布に群在性が認められ、住居址に建て替えが認められるもの(多重複住居を含む)、切り合いが認められるものが大抵存在する。また環状集落1類の遺跡には、墓域から多数の副葬品が出土している遺跡があるという特徴がある(七社神社前遺跡・茅ヶ崎貝塚(第2図1)・鷲森遺跡等)。鷲森遺跡は弧状配置の住居址群とその向い側の住居址群があるため環状集落に分類したが、環状ライン上の中間に住居址はなく、準環状集落に近いものである。環状集落内の土坑からは人骨が検出された例があり、埼玉県天神前遺跡では土坑d種から、北川貝塚では土坑f種から埋葬人骨が出土している。

継続的拠点集落中の非環状集落(第1表B類)は埼玉県道仏北遺跡、神奈川県遠藤広谷遺跡や東京都和田西遺跡(第2図2)くらいしかなく、少ない。これらの遺跡では墓壇の数は少なく、墓壇が群集する墓域はない。集落内の住居址の分布に群在性が認められ、住居址に建て替えが認められる。しかし住居址同志の切り合い関係がある遺跡(道仏北遺跡)と、ない遺跡(遠藤広谷遺跡)、住居址が接する程度の遺跡(和田西遺跡)がある。住居の密集度が関係しているのであろう。和田西遺跡には一辺10mを超える住居址が2軒存在している。なお十三菩提式期は住居軒数が少なく、同時存在で3軒以上の住居が存在する拠点集落はない。そこで参考までに同時存在2軒の住居址からなる神奈川県桜並遺跡を掲載しておく。当遺跡には墓壇は存在するが、それらが群集して墓域を形成することはない⁽²⁾。

B. 集落の継続時期

環状集落は諸磯a式期古段階に多く成立している。その後、断絶を挟む遺跡(天神前遺跡)や、諸磯b式期古段階ないしは中1段階で終わる遺跡もあるが(西ノ谷貝塚・雪ヶ谷貝塚)、存続しても諸磯b式中2段階(後葉)で終わっている遺跡が殆どであることが特徴である。諸磯b式新段階まで継続する環状集落は天神前遺跡と茅ヶ崎貝塚だけである。このうち天神前遺跡は興津I式期の住居址であり、関東地方東部の遺跡の中で捉えるべき遺跡となっている。茅ヶ崎貝塚は諸磯b式中2段階の住居址は未検出であるが、中2段階後葉の貝層(北斜面貝層)があるので、生業活動は諸磯b式中2段階にも存在し、諸磯b式期新段階にまで住居が存在するが、諸磯c式期には住居址はなくなる。その後居住が復活するのは十三菩提式期中段階である。

ここで興味深いのは北川貝塚や茅ヶ崎貝塚において諸磯c式期以降住居址はないのにもかかわらず、環状集落の中央に墓壇が存在する時期があるということである。居住地としては使用されなくなっても、周辺遺跡にとっての墓地として継続利用されていたと考えることができる。茅ヶ崎貝塚は十三菩提式中段階

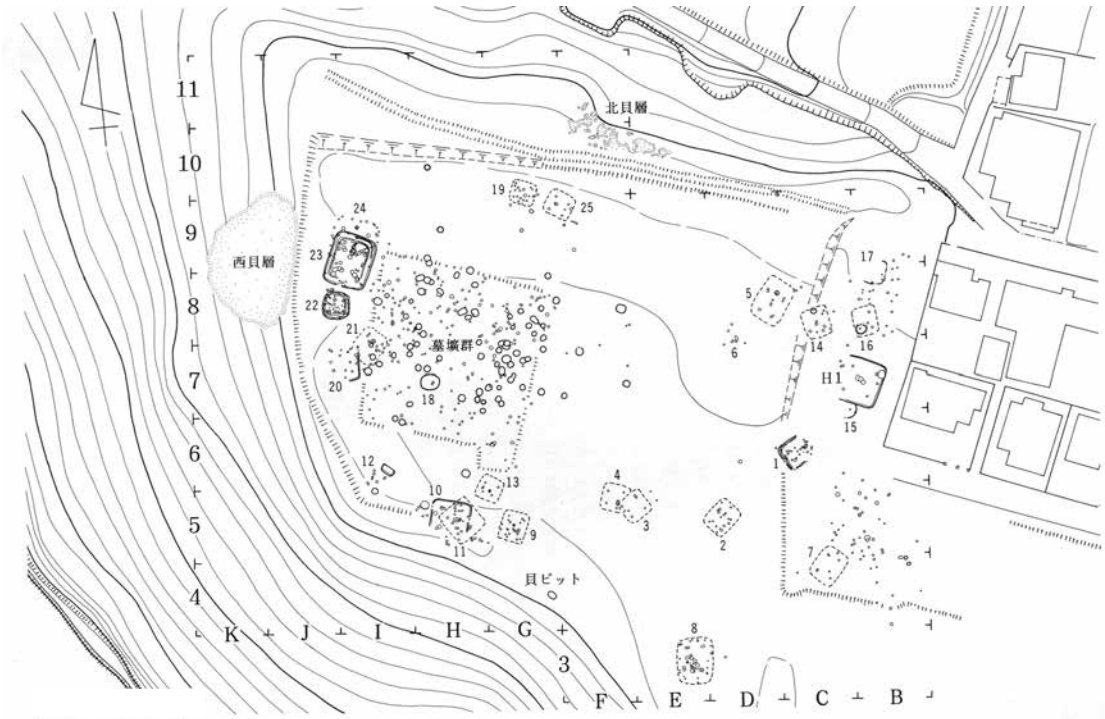
に居住地としての利用が再開するが、環状集落における居住域と墓域の位置関係は諸磯b式期の位置関係を忠実に継承している。居住断絶期間中も墓域と居住場所の空間的区別はできる状態にあったのであろう。これに関連する例として、土壌墓からなる墓域のみが認められた東京都多摩ニュータウンNo.753遺跡がある(東京都埋蔵文化財センター 1999)。

以上のように環状集落は諸磯c式期にはない。しかし非環状集落に属する東京都和田西遺跡では、軒数は少ないながらも諸磯c式期に住居は存在した。その後、非環状集落の桜並遺跡において同時存在1～2

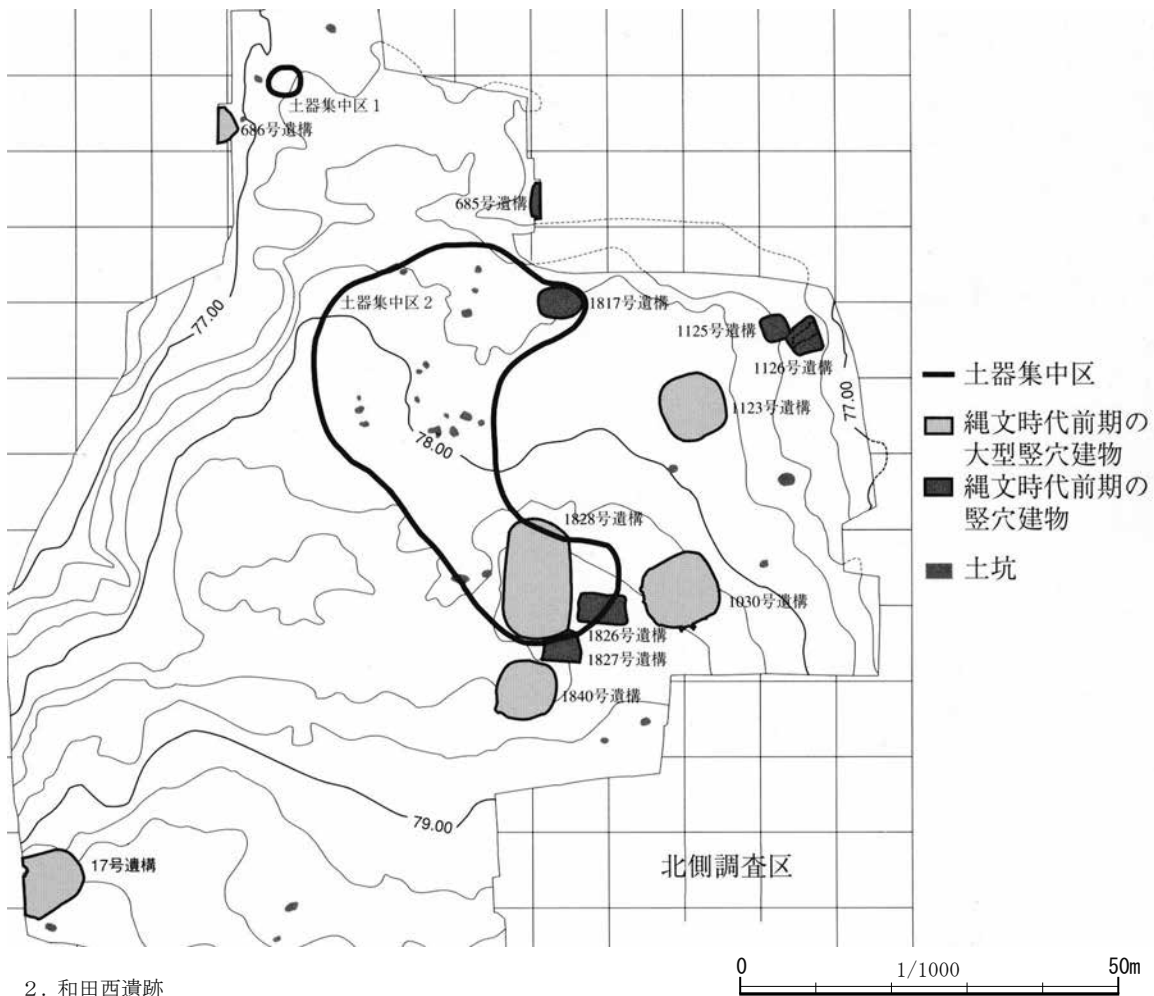
第1表 縄文時代前期後半の継続的拠点集落の諸属性(1) 関東地方南西部

遺跡名	遺構	黒浜		諸磯a		諸磯b			諸磯c			十三菩提		五領ヶ台	詳細時期不明	集落形態
		古中	新	古	新 浮島Ia	古中I 浮島Ib	中2 浮島II	新 興津I	古新I 興津II	新2 興津II	古 粟島台	中新 粟島台				
天神前	住居	4	8	6		2	2	2							7	A1
	貯蔵穴			○											○	
	不明土坑		○	○		○	○								◎人	
	墓壇					◎	◎								◎	
西ノ谷	住居	2		11	8	3									20	A1
	貯蔵穴															
	不明土坑														○	
	墓壇			○副		○副									○副	
雪ヶ谷	住居			6	7	10									7	A1
	貯蔵穴															
	不明土坑			○		○	○								◎	
	墓壇			○副	○副	◎副	○副								◎副	
居木橋	住居			5	1	1	2								4	A1
	貯蔵穴															
	不明土坑															
	墓壇		○	○副											◎副	
七社社前	住居	3		2	2	2	3								1	A1
	貯蔵穴			○											○	
	不明土坑		○			○	○									
	墓壇			○副	◎副	◎副									○副	
南堀	住居			3	2	1	1								14	A
	貯蔵穴						○									
	不明土坑				○	○									○	
	墓壇			○			○副								○	
北川	住居			1	1	11	3								7	(A1)
	貯蔵穴															
	不明土坑					○										
	墓壇					○	○副人 (貝層)	○	○副			○副				
茅ヶ崎	住居		1	5	2	3		1					2	1	11	A1
	貯蔵穴			○								○				
	不明土坑										○					
	墓壇			○副		○	○副		○	○	○	◎副	◎副			
鷺森	住居			5	4	4										A1
	貯蔵穴															
	不明土坑			○	○											
	墓壇			○副	○副	◎副	○副								◎副	
道仏北 (南側)	住居	2	3	6											4	B
	貯蔵穴														○	
	不明土坑														◎	
	墓壇														◎	
遠藤広谷	住居				1	4									1	B
	貯蔵穴															
	不明土坑															
	墓壇														○副	
和田西	住居			1		3	1	2	1							B
	貯蔵穴															
	不明土坑										○				○	
	墓壇														○	
*桜並	住居											2	2		1	
	貯蔵穴															
	不明土坑														○種	
	墓壇														○種	

*は短期的拠点集落をさす。



1. 茅ヶ崎貝塚



2. 和田西遺跡

第2図 縄文時代前期後半の継続的拠点集落(1) 関東地方南西部

軒の住居が十三菩提式の古・中・新段階にわたって存在している。

C. 貯蔵穴の存在状況

本地域での貯蔵穴は少ない。環状集落にしかなく、非環状集落にはない。諸磯 a 式期以前の例としては環状集落の天神前遺跡や七社神社前遺跡に土坑 a・b 種、諸磯 b 式期の例としては南堀貝塚に土坑 b 種がわずかにあるにすぎない。諸磯 c 式期の例はないが、十三菩提式期では茅ヶ崎貝塚に土坑 a 種がある。茅ヶ崎貝塚では土坑 a 種が 1 基あるだけであるが、該期の継続的拠点集落以外の遺跡に貯蔵穴が存在する。神奈川県折本西原遺跡 6 号土坑(小滝他1988)や東京都三矢田遺跡10号堅穴状遺構(須田・パリノ・サーヴェイ株式会社他1991)が例としてあげられる。とりわけ三矢田遺跡10号堅穴状遺構では覆土のウォーター・セパレーションにより、多量のオニグルミと、シノハシバミ・クリなどの堅果類が検出されている。関東地方南西部においては十三菩提式期に貯蔵穴の存在が明確になると言える。なお同時期の桜並遺跡では性格不明の土坑 d 種や墓壇と考えられる土坑からクルミが出土している。

② 関東地方東部(第 2 表、第 3・4 図)

a. 集落の形態

継続的拠点集落としては環状集落が多い。環状集落中央の住居空白地に墓壇が群集する墓域をもつ環状集落 1 類(第 2 表 A1)(千葉県木戸先遺跡、南羽鳥中岫第 1 遺跡 E 地点)と、環状集落中央の住居空白地に墓壇が群集する墓域をもたない環状集落 2 類(同 A2)(茨城県外山遺跡・町田遺跡)が存在する(第 3 図 1・2)。環状集落では集落内の住居址の分布に群在性が認められ、住居址に建て替えが認められるもの、切り合いが認められるものがある。但し、町田遺跡では住居址の建て替えや切り合いはない。

環状集落 1 類の遺跡においては、墓域の中に、副葬品が出土した墓壇が多数存在した。環状集落 2 類の外山遺跡・町田遺跡では墓壇は住居址の近くに分布している。千葉県上台貝塚(旧東練兵場貝塚)は発掘された住居址軒数は少ないが、18か所の環状に巡る地点貝層が存在し、貝層の下には住居址の存在が想定されるため、環状集落と考えられる。環状貝塚の中央部は調査していないので、環状集落 1 類か同 2 類かは判断できない。千葉県飯山満東遺跡は墓壇が群集する墓域をもつ集落であるが、墓域の西側と南側に未調査区があるので、集落構造の判断は行わなかった。

準環状集落(第 2 表 A')は千葉県大膳野南貝塚と豆作台遺跡がある(第 3 図 3・4)。大膳野南貝塚では径約 90m の弧状に住居址が存在し、集落中央の住居空白地を挟んで向かい側に 1 軒の住居が存在する時期があるものである。集落内の住居址の分布に群在性が認められ、同一群内の住居址同志が接近したものがある。また建て替えが認められるものもある。集落中央の住居空白地には土坑が 76 基存在する。土坑の内訳を見ると多くは性格不明の土坑 c・d 種と墓壇と考えられる土坑 e・f 種であるが、副葬品を伴出する墓壇は僅少である。墓域はあると考えるが、あまり明瞭ではない。豆作台遺跡では径約 47m の弧状に住居址が存在し、集落中央の住居空白地を挟んで向かい側に 1 軒の住居が存在する時期があるものである。集落内の住居址の分布に群在性が認められ、同一群内の住居址同志が切り合ったものがある。集落中央の住居空白地には散漫ながら土坑が存在し、その中には墓壇と考えられる形状のものを含んでいる。しかしそうした土坑は散漫であり、副葬品を伴出した土坑はなく、墓域があるとは言えない。

非環状集落(第 2 表 B 類)は、多くはないが、存在している。茨城県新池台遺跡は住居址が弧状に分布するもの、千葉県文六第 1 遺跡は住居址が列状に分布するもの、千葉県多田大天下遺跡で塊状に住居址がまとまっているものである(第 4 図)。集落内の住居址の分布に群在性が認められ、同一群内の住居址同志が

接近したものや切り合ったものがある。いずれも墓壇が群集する墓域をもっていない。

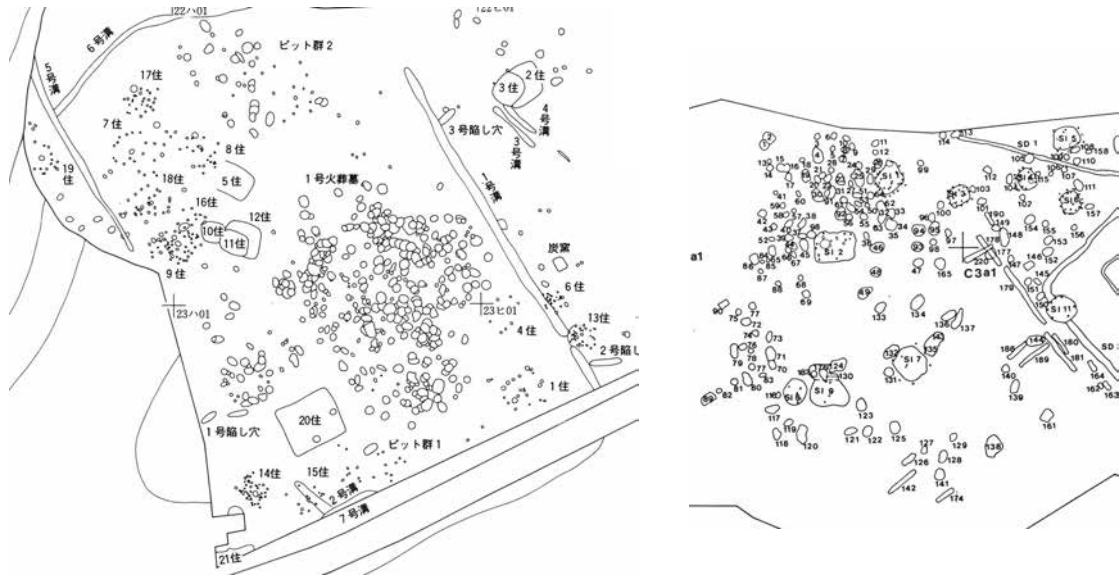
b. 集落の継続時期

環状集落・非環状集落共に、黒浜式新段階から形成される集落もあるが、浮島Ⅰa式期に始まる集落もあり、浮島Ⅰb式期には集落が多い。しかしそれらの集落の大半は浮島Ⅲ式期(諸磯b式中2段階後葉併行期)まで存在するが、そこで途絶えてしまうという傾向を指摘することができる。しかし当地方の場合、その後集落が皆無かというとはそうではなく、興津Ⅰ式期(諸磯b式新段階併行期)にまで存続する町田遺跡

第2表 縄文時代前期後半の継続的拠点集落の諸属性(2) 関東地方東部

遺跡名	遺構	黒浜		諸磯a		諸磯b			諸磯c			十三菩提		五領ヶ台	詳細時期不明	集落形態
		古中	新	古	新 浮島Ⅰa	古中Ⅰ 浮島Ⅰb	中2 浮島Ⅲ	新 興津Ⅰ	古新Ⅰ 興津Ⅱ	新2 興津Ⅱ	古 粟島台	中新 粟島台				
木戸先	住居			1	3	3									1	A1
	貯蔵穴														◎	
	不明土坑														◎	
中岫1E	住居	2			4	2	2								9	A1
	貯蔵穴														○	
	不明土坑				○	○	○								○	
外山	住居		1		3	9	10								11	A2
	貯蔵穴															
	不明土坑		○		○	○	○								◎	
上台	住居		1	1	1	1	1									A
	貯蔵穴															
	不明土坑															
町田	住居						5	1	1						4	A2
	貯蔵穴															
	不明土坑								○						◎	
飯山満東	住居	8	5	2	2		1	3							9	A1
	貯蔵穴															
	不明土坑			○	○	○	○									
大膳野南	住居					3	11								2	A'1
	貯蔵穴					○種									○種	
	不明土坑					◎種	○種	○							◎種	
豆作台3	住居					4	4								2	A'2
	貯蔵穴															
	不明土坑					○									○	
新池台	住居		2	1	10	1									10	B(弧状)
	貯蔵穴															
	不明土坑			○												
中岫1A	住居		1		2	3	1	1								B
	貯蔵穴															
	不明土坑															
文六第1	住居				2	3					1				5	B(列状)
	貯蔵穴															
	不明土坑															
多田大天下	住居					1	5								2	B(塊状)
	貯蔵穴															
	不明土坑														○	
*毛内	住居								3						11	○
	貯蔵穴															
	不明土坑														○	

*は短期的拠点集落をさす。



1. 南羽島中軸第1遺跡E地点

2. 町田遺跡

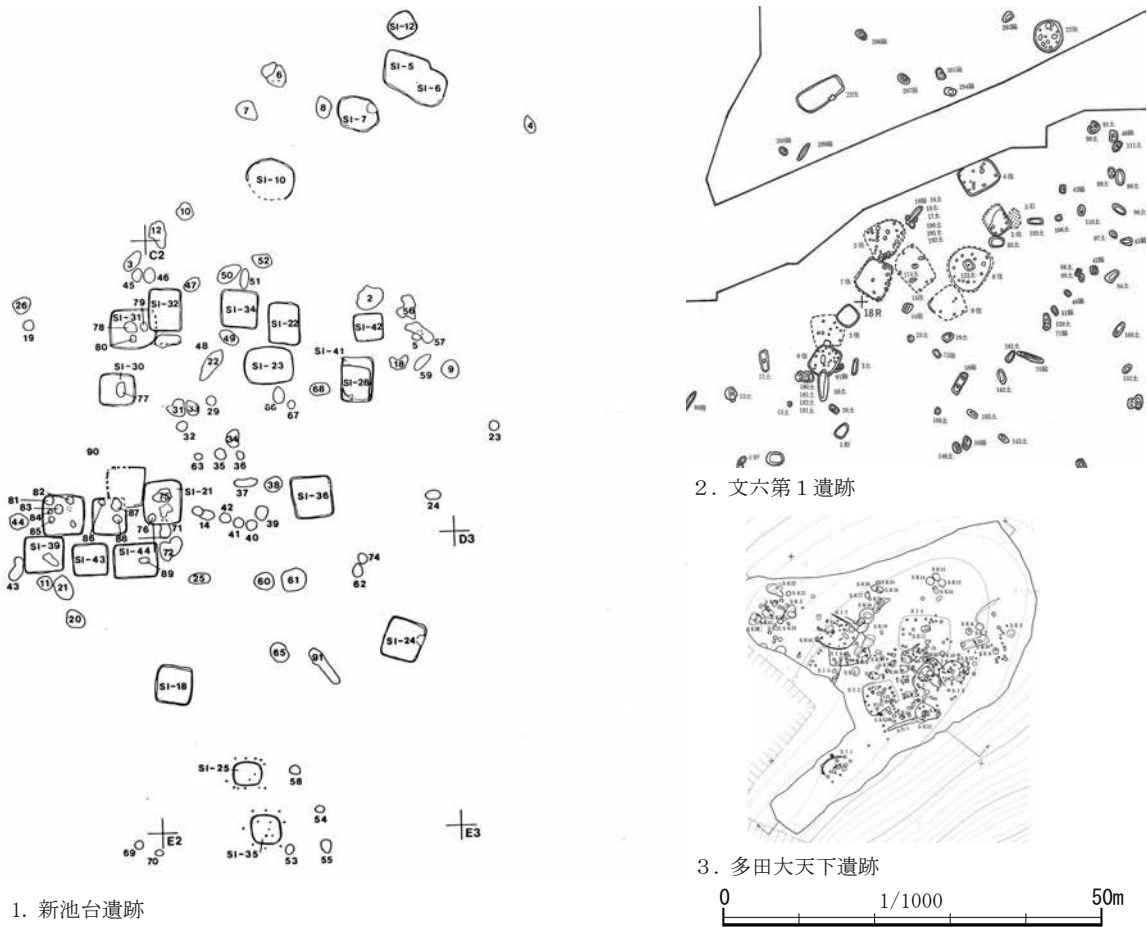


3. 大膳野南貝塚



4. 豆作台遺跡

第3図 縄文時代前期後半の継続的拠点集落(2) 関東地方東部



第4図 縄文時代前期後半の継続的拠点集落(3) 関東地方東部

や飯山満東遺跡もある。関東地方南西部の項で紹介した天神前遺跡もその中の一つである。

また前期末葉に関しては明確な継続的拠点集落を抽出することは難しい。千葉県古和田台遺跡(西本他1973)や毛内遺跡等(石橋1991)では興津Ⅱ式期の住居址が検出されている。毛内遺跡では興津Ⅱ式土器の平行沈線文+刺突貝殻文土器(松田2020)(いわゆる磨消貝殻文)を出土した住居址が3軒程はある。これを諸磯c式土器細分に対比するのは難しいが、諸磯c式土器新2段階併行期に平行沈線文+刺突貝殻文土器が減じ、縄文施文土器や貝殻文土器が主体になること(松田2020)を考えると、諸磯c式期新1段階併行期と考えられる(松田2020)。この他毛内遺跡には縄文施文土器を主体的に出土する住居址もあり(13号住居址)、本住居址は諸磯c式期新2段階併行に位置付けも可能であるが、土器は小片ばかりであるため、第2表では詳細時期不明に含めた。毛内遺跡は短期的拠点集落と考えておきたい。

また環状集落1類の木戸先遺跡、南羽鳥中岫第1遺跡E地点、飯山満東遺跡では、住居がない時期にも墓壇が存在している。このうち南羽鳥遺跡群をみると浮島Ⅱ式期には環状集落をなす中岫第1遺跡E地点に住居址と墓壇が、そこから南へ100mの位置にある非環状集落のA地点に住居址のみが存在し、中岫第1遺跡E地点の墓壇数は住居址数に比して多いので、E地点がA地点にとっての共同墓地としての役割を果たしていたと思われる(第5図、第3表)。そしてその役割はE地点で住居がなくなる興津Ⅰ式期にも存続していたようである。また千葉県内には住居址はないが、土壇墓が群集する墓域だけからなる加定地遺跡や寺ノ内遺跡がある(寺内1984・渋谷1991)。西山太郎氏が指摘したように(西山2001:53-72)、共同墓地が

存在したと考えられる。

c. 貯蔵穴の存在状況

本地域での貯蔵穴は少ない。大膳野南遺跡では、浮島式期の貯蔵穴と考えられる土坑 a・b 種が少量ながら存在している。そして無作為に抽出した土坑 a～d 種の14基の土坑全ての覆土からオニグルミが検出されている。ただし墓壙と思われる土坑 e・f 種の覆土の分析はしていないので、墓壙の覆土中のオニグルミの有無はわからない。貯蔵穴と墓壙の平面分布を見ると、集落中央の墓壙群の一角に貯蔵穴と種実が出土した土坑が存在している(第3図3)。関東地方東部において浮島式期の貯蔵穴が存在するのは極めて珍しい事例と言える。

③ 関東地方北西部(第4表、第6・7図)

a. 集落の形態

環状集落は、数は多くはないが、存在している。群馬県中野谷松原遺跡は、黒浜式期は列状集落との評価をされているが(大工原1996)、諸磯 b 式期には環状集落中央の住居空白地に墓壙が群集する墓域をもつ環状集落 1 類(第4表 A1)となる。住居址の軒数が多く、特筆すべきこととして住居址群の一角に掘立柱建物跡が検出されている(第6図)。群馬県大下原遺跡は、集落の南半分が未調査であるため、住居址が少ないが、環状集落中央の住居空白地に墓壙が群集する墓域をもつ環状集落 1 類と考えられる。両遺跡とも住居址の分布には群在性が認められ、住居址の建て替えや切り合いが存在する。また両遺跡では墓域から副葬品を出土する墓壙が多数検出されている。群馬県行田梅木平遺跡は東側集落と西側集落からなるが、東側集落は環状集落である。環状集落中央の住居空白部に、密集度は高くないが、墓壙が点在し、墓域をもつ環状集落 1 類と考える。しかし本遺跡では住居址の近くにも墓壙が存在している。住居址には建て替えや切り合いが存在する。土坑からの副葬品の出土は少ない。

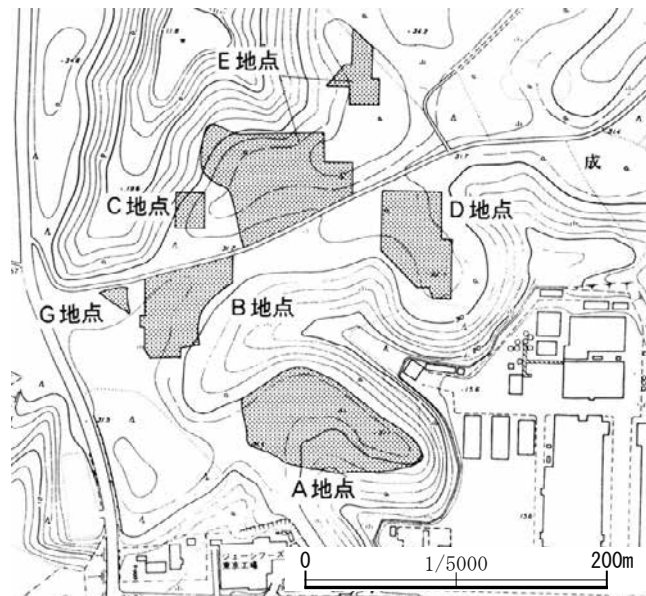
群馬県二軒在家原田・原田Ⅱ遺跡は環状集落であるが、環状集落中央の住居空白部に墓域をもたない環状集落 2 類(第4表 A2)である。住居址の分布には群在性が認められ、住居址には切り合いが存在している。また同県上丹生田屋敷遺跡も環状集落であるが、集落中央の住居空白部の土坑は少ない上、土坑の詳細な報告がないので、環状集落 1 類か同 2 類かの判断ができない。住居址軒数が多く、住居址の切り合いも見られる。この遺跡では土坑からの副葬品の出土は少ない。

群馬県行田大道北遺跡は 2 列の平行する列状住居址群からなり、住居址群の間に住居址空白部があるため、準環状集落(同 A')に分類した(第7図 1)。住居址空白部には墓壙がややまとまる箇所があるため、墓域をもつ準環状集落と考えた(同 A'1)。住居址の分布には群在性が認められ、住居址の建て替えや切り合いが存在する。

非環状集落(B 類)は多数存在する。丘陵地が多いという地形的なことも関係していると思われるが、関

第3表 南羽鳥中岫第1遺跡E地点とA地点の関係

	中岫第1遺跡E地点		中岫第1遺跡A地点	
	住居跡	墓壙	住居跡	墓壙
浮島Ⅱ式期	○	○	○	×
興津Ⅰ式期	×	○	○	×



第5図 南羽鳥中岫第1遺跡群

東地方北西部の特徴と言える。住居址は散漫な分布を示し、分布傾向の抽出が難しい遺跡が多いが(群馬県今井見切塚遺跡、今井三騎堂遺跡等)、群馬県荒砥二之堰遺跡は等高線に沿って弧状に住居址が分布している(第7図2)。住居址の分布には群在性が認められる場合が多いが、住居址の建て替えや切り合いの存在は遺跡によって異なる。住居址は密集する遺跡では住居址の建て替えや切り合いが存在するが(中棚遺跡、善上遺跡)、住居址が散漫な遺跡では住居址の建て替えや切り合いが存在しない(愛宕山遺跡、荒砥二之堰遺跡)。またその中間的様相を示す遺跡では、住居址の建て替えは存在せず、住居址が近接して存在している(小仁田遺跡A・D地区、三峰神社裏遺跡)。墓壇については、副葬品をもち確実に墓壇といえる土坑をもつ遺跡もあるが、墓壇は住居址付近に存在し、特定の場所に墓域を設けている遺跡はない。

b. 集落の継続時期

環状集落には黒浜式期新段階・諸磯a式期古段階から継続的に存在する遺跡(中野谷松原遺跡)もあるが、諸磯b式期古段階・中1段階から始まる遺跡(大下原遺跡・上丹生屋敷遺跡)もあり、諸磯b式期古段階・中1段階の遺跡は多い。この傾向は諸磯b式期中2段階までは継続するが、諸磯b式期新段階になると途絶えてしまう遺跡がある(中野谷松原遺跡・大下原遺跡)。したがって環状集落の数は減少する。しかしその一方、諸磯b式期新段階・諸磯c式期古・新1段階まで継続する環状集落もあり、行田梅木平遺跡や二軒在家原田遺跡・原田II遺跡、上丹生屋敷遺跡等が該当する。しかしそれらの環状集落も諸磯c式期新2段階になると住居は断絶してしまう。準環状集落の行田大道北遺跡は黒浜式期から継続的に存在する遺跡であるが、諸磯b式期新段階になると住居は一旦断絶してしまう。

非環状集落も黒浜式期から継続する集落、諸磯a式期に始まる集落、諸磯b式期に始まる集落があり、それらは大抵諸磯b式期中2段階まで継続するが、諸磯b式期新段階には断絶してしまう遺跡がある(群馬県今井見切塚遺跡、大牛中原遺跡、小仁田遺跡A・D地区、善上遺跡)。しかしその一方で諸磯b式期新段階・諸磯c式期古・新1段階まで継続する遺跡(群馬県愛宕山遺跡・今井三騎堂遺跡・三峰神社裏遺跡)がある。また諸磯b式期新段階に新たに始まり、諸磯c式期古・新1段階まで継続する非環状集落もある(糸井宮前遺跡・荒砥二之堰遺跡、吹屋伊勢森遺跡)。しかしそれらの遺跡も諸磯c式期新2段階になると住居は断絶してしまう。唯一の例外は群馬県大上遺跡で、諸磯c式期新2段階の住居址が存在する。また

第4表 縄文時代前期後半の継続的拠点集落の諸属性(3) 関東地方北西部

遺跡名	遺構	黒浜		諸磯a			諸磯b			諸磯c		十三菩提		五領ヶ台	詳細時期不明	集落形態
		古中	新	古	新	古中1	中2	新	古新1	新2	古	中新				
中野谷松原	住居	42	2	1	1	17	17					1			20	A1
	貯蔵穴	◎	○	○	○	◎	○			○	○	○				
	不明土坑	◎		○		◎	○									
	墓壇	○	○		○副	◎副	◎副		○		○	○副		○副		
大下原	住居	5				1	3		2						2	A1
	貯蔵穴		○			○									○副	
	不明土坑					○	○									
	墓壇					○副	◎副								○副	
行田梅木平	住居	1	1	4		4	5	5	2						4	A1
	貯蔵穴		○	○		○	○	○								
	不明土坑	○			○	◎	◎	○							◎	
	墓壇			○		◎副	○		○						○副	
二軒在家原田・原田II	住居	33	2		1	13	12	5	12						29	A2
	貯蔵穴	○		○		○	○			○					◎	
	不明土坑	○		○	○	◎	◎	◎	◎	○					◎	
	墓壇	○		○	○	○	○	○	○		○				◎	

遺跡名	遺構	黒浜		諸磯a		諸磯b			諸磯c			十三菩提		五領ヶ台	詳細時期不明	集落形態
		古中	新	古	新 浮島Ia	古中I 浮島Ib	中2 浮島II	新 興津I	古新I 興津II	新2 興津II	古 粟島台	中新 粟島台				
上丹生屋敷山	住居	4				12	11	4	4	1			3	67	A	
	貯蔵穴															
	不明土坑 墓壇															
行田大道北	住居	15	10	15	3	2	4		11		1		2	20	A'1	
	貯蔵穴	◎	○		○				○	○		○	◎	◎		
	不明土坑 墓壇	◎	◎	○	○	○	◎		◎	○	○	○	◎	◎		
稲荷山	住居		5	2	2	2		2	1					4	B	
	貯蔵穴													◎		
	不明土坑 墓壇													◎		
中棚	住居	5	2	4		2	6	1	1					4	B	
	貯蔵穴	○	◎	○	○	◎	○	○						○		
	不明土坑 墓壇						○副							○副		
芳賀東部	住居	6		2	2	1	4	3	5					6	B	
	貯蔵穴				○		○									
	不明土坑 墓壇				○	○	○									
今井見切塚	住居			4	1	4	1		7					3	B	
	貯蔵穴			◎	◎	○	○		○					◎		
	不明土坑 墓壇			◎	○	○	○		◎					◎		
大牛中原	住居	6	1			9	9		7			2		7	B	
	貯蔵穴					○	○		○							
	不明土坑 墓壇	○副	○			○	○		○副					○副		
小仁田AD	住居					5	10					2		3	B	
	貯蔵穴													○		
	不明土坑 墓壇													◎		
善上	住居	6	1			3	1							4	B	
	貯蔵穴	◎	○			○								○		
	不明土坑 墓壇	○				○副	○							○副		
愛宕山	住居					3	3	3	1					2	B	
	貯蔵穴					◎	○									
	不明土坑 墓壇					◎	◎種									
今井三騎堂	住居			4	2		4	4	11					9	B	
	貯蔵穴						◎	◎	○					◎		
	不明土坑 墓壇			○	○		◎	◎	○					◎		
三峰神社裏	住居	2					2	1	7					1	B	
	貯蔵穴							○	○							
	不明土坑 墓壇	◎					○	○	○							
糸井宮前	住居	18	4					33	24					9	B	
	貯蔵穴	○	○					○	○					○		
	不明土坑 墓壇	○	○	○				◎副	◎副					○副		
荒砥二之堰	住居							6	1						B(弧状)	
	貯蔵穴															
	不明土坑 墓壇							○	◎							
吹屋伊勢森	住居							4	1						B	
	貯蔵穴							◎種	◎							
	不明土坑 墓壇							○	◎					○		
大上	住居							1	9	2		1			B	
	貯蔵穴							○	◎					○		
	不明土坑 墓壇							◎	◎副	○	○	○副	○副	○副		

短期的拠点集落であるが、群馬県芳賀北曲輪遺跡で該期の住居址が複数軒存在する(金子他1990)。

本地域の環状集落・準環状集落においては、住居が築かれなくなる時期における集落中央の墓域の存続を指摘できる明確な例はない。環状集落の中野谷松原遺跡では住居が築かれぬ十三菩提式期に大木6式土器を埋納した墓壇(D1126号土坑)が検出されているが、環状集落中央の墓域の中にはなく、単独で築かれている。また非環状集落の大上遺跡においては、住居が築かれぬ十三菩提式期古段階～五領ヶ台式期に墓壇が確認されてはいる。しかしこの遺跡でも住居の主要形成時期とは異なる時期に、住居が分布する場所とは異なる場所に、墓地が作られたようである。



第6図 縄文時代前期後半の継続的拠点集落(4) 関東地方北西部 左が北

c. 貯蔵穴の存在状況

本地域では黒浜式期古・中段階併行期(有尾式期)から貯蔵穴は存在する。環状集落1類・環状集落2類・準環状集落においては、遺跡の存在する諸磯a・b・c式期にしばしば貯蔵穴を伴う。貯蔵穴の位置を見ると、行田梅木平遺跡、二軒在家原田・原田Ⅱ遺跡では貯蔵穴は住居址の近くに散在するのみである。中野谷松原遺跡では中央墓域の北・南側に貯蔵穴(D659・661・701等)がややまとまる場所があるが、特定の場所に群集するというほどではなく、一時期の個数も1～2基と少なく、貯蔵穴の分布する場所も住居の近くである(第6図)。諸磯c式期新段階以降になると、同時期の住居が築かれないが、1～2基の貯蔵穴が作られる遺跡がある(中野谷松原遺跡、二軒在家原田・原田Ⅱ遺跡)。集落ではない場所に貯蔵穴が作られたのか、居住地に貯蔵穴を作ったが、住居は掘り込みが浅く、遺存しなかったのであろうか。一方五領ヶ台式期になると貯蔵穴が急増し、群集貯蔵穴が出現するようである。行田大道北遺跡では五領ヶ台式期には環状集落が消滅するが、住居からやや離れた場所に貯蔵穴の群集が認められる。また上丹生遺跡群の下丹生赤子Ⅱ遺跡でも集落から離れた地区に五領ヶ台式期の群集貯蔵穴が作られる(腰塚他2009)。

2 集落の消長に見る断絶期とその要因

(1) 集落の消長に見る2つの断絶期

先に関東地方内の各地域の集落の特徴について述べた。集落の開始時期や、住居が最も多い時期は各集



第7図 縄文時代前期後半の継続的拠点集落(5) 関東地方北西部

落によって異なるが、多くの集落の傾向に共通する特徴を抽出することができる。それは関東地方南西部で諸磯 b 式期新段階に一部の例外(茅ヶ崎貝塚)を除いて、環状集落が断絶することと、関東地方北西部で諸磯 c 式期新 2 段階に環状集落が断絶することである。前者を前期後半断絶期 1 期、後者を前期後半断絶期 2 期とする。

断絶期 1 期(諸磯 b 式期新段階) 先に関東地方南西部において環状集落が途絶えると指摘したが、集落に変化が見られるのは関東地方南西部だけではない。関東地方北西部においても長期間続いた環状集落の中に断絶する集落がある。また関東地方北西部の非環状集落にもこの時期に断絶する集落がある。但し環状集落・非環状集落共に残存する集落はある。関東地方東部でもこの時期、環状集落の中に断絶するものが多い。但し関東地方東部では数は減るが、興津 I 式期(諸磯 b 式期新段階併行)まで継続する集落があり、その後、短期的拠点集落は存在する(毛内遺跡)。該期の変化は関東地方全域に及んだが、関東地方南西部において著しかったようである。

断絶期 2 期(諸磯 c 式期新 2 段階) 関東地方北西部で諸磯 c 式期新 2 段階に環状集落が断絶するが、この時期、非環状集落も一部の例外を除き、消滅する。関東地方南西部においてはそれ以前から和田西遺跡を除き、拠点集落は存在しなかったが、その和田西遺跡も諸磯 c 式期新 2 段階には住居は存在しなくなる。また関東地方東部においても、それまで存在していた短期的拠点集落(古和田台遺跡・毛内遺跡)が消滅する。断絶期 2 期に断絶しない集落は群馬県大上遺跡くらいである。また継続的拠点集落ではないが、短期的拠点集落である芳賀北曲輪遺跡が数少ない集落として存在する。そして関東地方全域的に、この時期以降、前期末葉にかけて拠点集落はなくなる。断絶の程度は、断絶期 2 期の方が断絶期 1 期よりも大きい。

(2) 断絶期の放射性炭素年代

関東地方の諸磯 b・c 式土器に関して、型式の各細分段階レベルでの年代を示すことはできない。それは土器の各細分段階の土器の測定例が現時点では少ないことと、放射性炭素年代の較正年代の幅が大きいことによる。

そこでここでは、諸磯 b 式土器・諸磯 c 式土器という大雑把なレベルを含んでしまうが、従来報告されている放射性炭素年代(補正值)を基に Intcal09により求めた諸磯 b 式土器・諸磯 c 式土器 2σ 較正年代(工藤2012)を第 5 表に記した。土器型式の細分段階比定は筆者が行った。山梨県寺前遺跡 2 住居址 A-6, PJ-2埋設炉②の年代は他の諸磯 b 式土器の年代より古く出ているので、ここでは除外する。これによれば諸磯 b 式中 1 段階と諸磯 b 式中 2 段階の間に年代差は出てきていない。現行の較正年代は200年ほどの幅をもち、それは土器の細別段階より長いからであろう。ここでは第 5 表を参考に、諸磯 b 式土器は 5930-5730calBP (1950年起点)、諸磯 c 式土器は5650-5470calBP と考えておく。従って断絶期 1 期の年代は5930-5730calBP の中、断絶期 2 期の年代は5650-5470calBP の中に入ることになる。

第 5 表 縄文時代前期後葉・末葉の放射性炭素年代

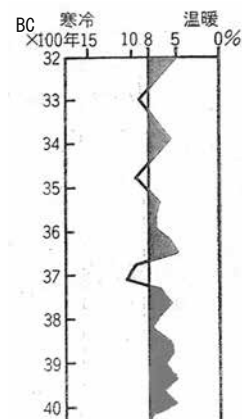
県	遺跡名	出土状況	種類	型式	測定機関番号	14CBP	Intcal09 (2σ)	δ 13C‰	文献
東京	多摩NT No.520	14住居	炭化種実	諸磯 b 中1	IAAA-11629	5110±30	5930 5740		小林他2004b
群馬	向原Ⅱ	J2住居炉	炭化材	諸磯 b 中2	IAAA-11633	5100±35	5920 5740	-28.2	小林他2004a
群馬	向原Ⅱ	J2住居ピット9	炭化材	諸磯 b 中2	IAAA-11634	5115±35	5930 5740	-28.7	小林他2004a
群馬	松原	G21 P. J66 14P-2	土器付着物	諸磯 b	Beta-194401	5080±40	5920 5730	-26.0	西本編2009
山梨	寺前	2住居址 A-6, PJ-2埋設炉②	土器付着物	諸磯 b	Beta-189576	5320±40	6270 5990	-26.0	西本編2009
山梨	寺前	6住居址 A-5, AJ-6	土器付着物	諸磯 c	IAAA-31583	4830±30	5650 5470		西本編2009

(3) 断絶期の要因

この2回の断絶期はどうして起こったのであろうか。集落断絶の要因としてしばしば考えられるものに火山噴火によるテフラの降灰や地球規模の気候変動がある。それぞれ検討してみたい。

テフラ この時期、山梨県から関東地方南部に降灰したテフラとして上杉陽氏の言うS-3・4テフラがある(上杉1990:3-28)。このうちS-4の炭質土壌の放射性炭素年代値を見ると、 2σ 較正年代で5720-5580calBPという年代が出ており、前期後葉・末葉の諸磯b式期または諸磯c式期に該当すると考えられる(山元他2005:53-70、松田2021:85-116)。このテフラの噴出源は富士火山であり、関東地方南西部で5cmほどの層厚が確認されている。また関東地方北部では浅間火山のテフラがある。浅間火山に関しては約5600年前の千ヶ滝軽石の存在が知られている(安井2015:211-240)。

気候変動 群馬県尾瀬ヶ原のハイマツ花粉の分析によると、5700年前～5300年前(較正年代)に寒冷な時期と温暖な時期が何度か繰り返されたという結果が提示されている(阪口1984 第8図)。また鳥取県東郷池の年縞堆積物の分析には5800～5200varveBPに海水準の低下が見られたという(福沢他1999:463-484)。また中国ドンゲ洞窟の石筍の酸素安定同位体比によれば5500²³⁰ThBPにモンスーンの弱まる時期があること(Wang et al. 2005)、北大西洋の深海堆積物の分析から5900calBPに表層水温の低下に起因すると考えられるイベントの存在が指摘されていることから(Bond et al. 1997)、工藤雄一郎氏は5900calBPを境に、それ以前の時期をPGWarm-2、それ以後の時期をPGCold-1とした(工藤2012)。工藤氏の画期は諸磯b式期に置かれている。



第8図 気温曲線

断絶期の要因 前期後葉～末葉においては、テフラの降灰と、寒冷化およびそれに伴う海水準低下が認められる。どちらも断絶期の要因候補としてあげられるものである。断絶期1期について言うと、諸磯b式期の継続的拠点集落の断絶は諸磯b式期新段階に突然起こったわけではない。遺跡の断絶が諸磯b式期中2段階に起こった遺跡もあり(西ノ谷貝塚・雪ヶ谷貝塚等)、拠点集落の消滅は漸移的に起こったと考えられる。海岸部での継続的拠点集落はいずれも貝層を伴うものである。奥東京湾沿岸では、縄文海進で高くなった海水準が前期中葉以降に転じるにつれ(遠藤他前掲)、関東地方南西部の大宮台地周辺で諸磯a式期になると貝塚が減少し、関東地方南西部の多摩川・鶴見川・目黒川流域では諸磯b式期に貝塚が減少する(松田2006)。この貝塚の減少は内陸側から進行するので、その一因には海水準低下、さらには気候の寒冷化が考えられるが、この変化は漸移的である。また断絶期1期の環状集落の断絶は関東地方南西部の現東京湾西岸で著しい。断絶期1期の要因は気候の寒冷化とそれに伴う海域環境の変化、海産資源量の減少が考えられる。

断絶期2期の現象は、断絶期1期に断絶せず継続した集落や、断絶期1期から新たに開始した集落が諸磯c式期新1段階まで継続し、諸磯c式期新2段階に断絶するものである。その直前の遺跡は関東地方北西部に多く存在し、関東地方東部にもいくらか存在するが、その断絶は漸移的ではなく突然起きている。関東地方南西部では環状集落は消滅したままである。さらに重要なことは、断絶期2期に関東地方全域で環状集落は消滅するが、その後、前期末葉を通じて、その状況は継続していることである。浅間火山が約5600年前に千ヶ滝軽石を噴出したが、その前の御代田軽石(約6000年前)と後の浅間D軽石(5200年前)の間には400年間の静穏期があり(安井前掲)、火山噴火に原因を求めると、静穏期に遺跡が回復し得ると考え

られる。そのように考えると、断絶期2期も気候変動の影響が考えられる。前述の尾瀬ヶ原のハイマツの花粉分析によれば、5700年前～5300年前(較正年代)の長きにわたって寒冷な時期と温暖な時期が何度か繰り返されており(阪口前掲)、今村啓爾氏も前期末葉の衰退の原因として着目している(今村2010:487-489)。断絶期1期、2期が阪口氏の分析によって導かれた気温変動のどこに当たるのかの解明は現行の年代尺度ではできないが、断絶期の存在に気候変動が関与していると考えられる。

3. 貯蔵穴の存在

寒冷な時期が訪れ、断絶期1期を迎えた時、関東地方南西部では環状集落、非環状集落含め、継続的拠点集落は一部の例外を除き、ほとんどなくなり、その後も、継続的拠点集落は復活しなかった。一方北にあり寒いはずの関東地方北西部においては、断絶期1期に断絶しなかった環状集落や非環状集落がある。また断絶期1期に始まり、その後、諸磯c式期古段階～新1段階にかけて継続する非環状集落も多く存在している。この他、関東地方東部では断絶期1期以降、集落は減るが、継続する環状集落もあり、短期的拠点集落は諸磯c式期新1段階まで存在する。断絶期1期におけるこの地域差の理由はどこにあるのだろうか。

断絶期1期に拠点集落の減少が著しかった関東地方南西部の現東京湾西岸において、断絶した環状集落は貝層を伴っていた。貝塚の減少は海水準の低下や海域環境の変化、それに伴う海産資源の減少を意味し、当該地域の集落が海産資源に高く依存していたことが衰退の原因の一つに考えられることは了解されよう。

一方関東地方東部で集落の凋落度が関東地方南西部ほどではなかったのは、千葉県上台貝塚が興津II式期に存在することに示されるように、海産資源の減少は関東地方南西部ほどではなかったからなのかもしれない。しかし埼玉県域では貝層を伴わない集落も断絶しているため、海域環境の変化に全ての原因を帰する訳にはいかない。寒冷化する気候の変化に対処する適応戦略の差も考慮する必要がある。

今回の分析で、前期後葉～末葉にかけて関東地方北西部の遺跡には貯蔵穴が存在することが明らかになった。従来から関東地方北西部の遺跡に貯蔵穴があることは指摘されていたが(今村1989:61-94、坂口2003)、諸磯b式期～諸磯c式期の関東地方南西部の遺跡には貯蔵穴はほとんどなく、関東地方南西部で貯蔵穴が存在するようになるのは十三菩提式期になってからと考えられる。関東地方東部も貯蔵穴はほとんどなく、大膳野南貝塚にのみ例外的に存在している。関東地方北西部と、関東地方南西部・東部では、貯蔵穴の存在状況に際立った差があったと言える。

大膳野南貝塚では明確に貯蔵穴といえる土坑a・b種の数多くはないが、土坑a・b種と、用途不明の土坑c・d種から種実が出土した。土坑a・b種と種実が出土した土坑c・d種は比較的狭い範囲に分布する。無作為に抽出した14基の土坑全てから種実が検出されたとのことであるから、覆土に種実を含む土坑の分布はもっと広がると思われる。関東地方東部の遺跡では貯蔵穴や種実を含む土坑は多くないが、大膳野南貝塚では集落中央の住居空白部に少なからず存在している。この意味するところはよくわからないが、大膳野南貝塚には関東地方北西部で作られたと思われる精巧な獣面把手(戸田他2014:第169図4)や極小円形貼付文により目を表現した獣面把手(同3)があることから、関東地方北西部とのつながりが想起される。関東地方北西部の貯蔵穴を導入し、住居空白地の一角にそれを築いた可能性も考えられる。

今回貯蔵穴とした土坑a種、b種からは実際種実の報告がある(第1・2・4表の「種」参照)。具体的に

前期中葉～末葉の遺構から出土している植物遺存体をまとめてみると第6表ようになる。これを見るとクルミを主に堅果類が多いことがわかる。縄文前期はクリの利用が知られており(能代・佐々木2014:15-48)、さらに埼玉県犬塚遺跡ではダイズ属・アズキ亜属や多くのシソ属・ニワトコ、東京都七社神社前遺跡第⑩地点38号土坑出土の鉢形土器からは多くのダイズ属と、ヌルデ近似種・シソ属の圧痕が検出されている。ダイズ属はそのサイズから野生種ツルマメと考えられている(山本他2018:1-22、山本・佐々木他2021:25-36)。堅果類とマメ類等では遺存度が異なり、前期集落の集団の各種植物質食料への依存度をどのように評価するかは今後方法論の開拓が必要になるが、堅果類への依存度は決して低くなかったと思われる。第6表を見ると、関東地方南西部も北西部も、多く出土しているのはクルミであり、差がない。差があるのは関東地方北西部では環状集落でも非環状集落でも貯蔵穴が作られ、同南西部の集落ではそれが作られなかったということである。貯蔵穴を有し、堅果類を長期保存する適応戦略を関東地方北西部の集落はもっていたために、寒冷な気候が訪れても集落は存続できた。食料長期保存の適応戦略をもたなかった関東地方南西部の集落は気候変動には対処できず、存続できなかったのではなかろうか。

また集落形態の差も関係したと思われる。関東地方北西部では断絶期1期に環状集落・準環状集落の半数が消滅し、非環状集落も半数は断絶するが、該期に新たに出現する非環状集落もある。環状集落は多くの構成員の居住を可能にし、住居の切り合いや建て替えが頻繁に存在するが、集落中央の墓域の墓壇に多くの副葬品が入れられる傾向があり、多くの物資や優品が集まる利点があったと考えられる。しかし集団規模が大きいため、気候変動への対処という点では脆弱であった。非環状集落は、環状集落のように多くの住居を構えることはできず、墓は住居の付近に作られ、副葬品も入れられることは少なかったが、集団規模が小さかったため、気候変動へは柔軟に対処できたのではなかろうか。このように縄文時代前期の関東地方の集落は多様性をもっていたのである。

しかし断絶期1期を乗り越え、その後存在した集落も断絶期2期にほとんどが断絶した。断絶期1期より寒冷な気候が訪れたと考えられる。関東地方北西部の集落で貯蔵穴は作られていたが、少数の貯蔵穴が住居に付属して作られるだけで、群集するものではなかった。関東地方北西部で貯蔵穴が群集化し始め

第6表 縄文時代前期後葉・末葉の種実出土状況

県	遺跡名	遺構名	土坑分類	出土種実	伴出土器
東京	三矢田遺跡	10号堅穴	土坑 a 種	ナグミ、イヌデ 近似種、ツルハナミ?、クリ、キナ?、ミズキ、アサ?	十三菩提式新段階
神奈川	桜並遺跡	1号住居址		ナグミ	十三菩提式中段階
		5号土坑	土坑 f 種	ナグミ	十三菩提式
		15号土坑	土坑 d 種	ナグミ	十三菩提式
		28号土坑	土坑 d 種	ナグミ	十三菩提式
千葉	大膳野南遺跡	69号土坑	土坑 a 種	ナグミ	浮島 I b 式
		84号土坑	土坑 b 種	ナグミ	浮島 I b 式
		77号土坑	土坑 c 種	ナグミ	諸磯 b 式古段階
		110号土坑	土坑 d 種	ナグミ	浮島 I b 式
		79号土坑	土坑 d 種	ナグミ、キナ?	諸磯 b 式古段階
		58号土坑	土坑 d 種	ナグミ	浮島 II 式
		78号土坑	土坑 b 種	ナグミ	諸磯 b・浮島式
		66号土坑	土坑 d 種	ナグミ、キナ?	諸磯 b・浮島式
		68号土坑	土坑 d 種	ナグミ	諸磯 b・浮島式
		70号土坑	土坑 d 種	ナグミ	諸磯 b・浮島式
		83号土坑	土坑 d 種	ナグミ	諸磯 b・浮島式
		80号土坑	土坑 d 種	ナグミ	前期
		72号土坑	土坑 d 種	ナグミ	前期
		85号土坑	土坑	ナグミ、キナ?、カスザンシヨウ	前期
群馬	愛宕山遺跡	138号土坑	土坑 d 種	ナグミ	諸磯 b 式中段階
	大上遺跡	145号土坑		ナグミ	前期
	吹屋伊勢森遺跡	I 区42号土坑	土坑 a 種	クリ	諸磯 b 式新段階

るのは中期初頭になってからである。関東地方南西部でも十三菩提式期に貯蔵穴が作られるが、その数は少なかった。関東地方の食料保存戦略では、断絶期2期の気候変動を克服することはできず、この時期を最後に継続的拠点集落は消滅してしまったのであろう。

4 おわりに

本論では縄文時代前期中葉～末葉の関東地方において、拠点集落は環状集落と非環状集落があること、そして拠点集落の消長を見ると、断絶期1期(諸磯b式期新段階)と断絶期2期(諸磯c式期新2段階)があり、断絶の要因は寒冷な気候によるものと解釈した。関東地方北西部の集落はクルミに代表される堅果類を貯蔵穴に保存する環境適応戦略をもっていた。また集落も集団規模の小さい非環状集落が多かった。こうしたことから関東地方北西部の集団は断絶期1期に集落を多く存続させることができた。しかし該期の貯蔵穴の数は少なかったため、断絶期2期の気候変動は克服できず、拠点集落は消滅したと解釈した。

但し本論は集落の動向を主として遺構から解釈したものである。今後は石器組成や植物質食料の研究を進めて、総合的に解釈する必要がある。

本論作成に際し、近江哲氏、早田勉氏、山本華氏に大変お世話になりました。感謝の意を表します。

註

- (1) 結節浮線文は諸磯c式新1段階に遡る可能性があるが、主体は諸磯c式新2段階なので、新2段階として扱った。
- (2) 埼玉県水子貝塚や塚屋遺跡は調査箇所が集落の一部にとどまるため、取り上げなかった。

参考文献 (文献は膨大なため、第1・2・4表で使用した報告書の内、松田2020に掲載のものは省略した。)

- 安斉正人 2012『気候変動の考古学』同成社
- 石川博行他 2012『居木橋遺跡(A地区)』加藤建設株式会社
- 石坂 茂 1981『荒砥二之堰遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
2005『今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡－縄文時代編』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石橋宏克 1991「第2章 毛内遺跡」『関東地方東部自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』千葉県文化財センター
- 井上 賢他 1999『豆作台遺跡Ⅰ』君津都市文化財センター
- 井上昌美 2006『吹屋伊勢森遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 今村啓爾 1989「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌』六興出版
2000「諸磯c式の正しい編年」『土曜考古』24号
2010『土器から見る縄文人の生態』同成社
- 上杉 陽 1990「富士火山東方地域のテフラ標準柱状図」『関東の四紀』16
- 遠藤邦彦他 2022『縄文海進』富山房インターナショナル
- 大賀 健他 1985『1北貝戸遺跡・2川上遺跡・3小仁田遺跡』山武考古学研究所
- 大平理恵他 1998『七社神社前遺跡Ⅱ』北区教育委員会
- 金子正人・長島郁子 1990『芳賀北曲輪遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 河合伸一他 2013『道仏北遺跡・道仏上遺跡』宮代町教育委員会
- 工藤雄一郎 2012『旧石器・縄文時代の環境文化史』新泉社

- 腰塚徳司他 2009「上丹生赤子Ⅱ遺跡」「上丹生屋敷山遺跡」『丹生地区遺跡群』富岡市教育委員会
- 小滝 勉他 1988『折本西原Ⅰ』折本西原遺跡調査団
- 小林謙一 2004『縄紋社会研究の新視点』六一書房
2008「縄文時代の暦年代」『歴史のものさし 縄文時代研究の編年体系』同成社
- 小林謙一他 2004a「群馬県安中市向原遺跡出土試料の¹⁴C年代測定」『天神林遺跡・砂押Ⅲ遺跡・大道南遺跡・向原Ⅱ遺跡』安中市教育委員会
2004b「多摩ニュータウン遺跡No.520遺跡出土試料の炭素年代測定」『多摩ニュータウン遺跡 No.520遺跡』東京都埋蔵文化財センター
- 小宮恒雄 2002『茅ヶ崎貝塚』横浜市ふるさと歴史財団
- 坂上克弘 1995『桜並遺跡』横浜市ふるさと歴史財団
- 坂口 隆 2003『縄文時代貯蔵穴の研究』アム・プロモーション
- 阪口 豊 1984「日本の先史・歴史時代の気候—尾瀬ヶ原に過去7600年の気候の変化の歴史を探る」『自然』1984年5月号
- 坂本 彰 2003『西ノ谷貝塚』横浜市ふるさと歴史財団
2007『北川貝塚』横浜市ふるさと歴史財団
- 笹森健一他 1987『鷺森遺跡の調査』上福岡市教育委員会
- 渋谷 貢 1991「寺ノ内遺跡」『千葉県芝山町 大台遺跡群』山武郡市文化財センター
- 清水 司 2019『大牛中原遺跡』富岡市教育委員会
- 菅原龍彦 2017『西横野中部地区遺跡群 二軒在家原田遺跡・二軒在家原田Ⅱ遺跡』安中市教育委員会
- 鈴木保彦 1988「定形的集落の成立と墓域の確立」『長野県考古学会誌』57号
2014「晩氷期から後氷期における気候変動と縄文集落の盛衰」『縄文時代』25号
- 須田英一・パリノ・サーヴェイ株式会社他 1991『真光寺・広袴遺跡群Ⅵ 三矢田遺跡』鶴川第二地区遺跡調査会
- 清藤一順 1975『飯山満東遺跡』千葉県土地公社
- 関根慎二他 1986『糸井宮前遺跡Ⅱ』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大工原豊 1996『中野谷松原遺跡—縄文時代遺構編』安中市教育委員会
- 大工原豊他 1998『中野谷松原遺跡—縄文時代遺物本文編』安中市教育委員会
- 大工原豊他 1993『大下原遺跡・吉田原遺跡』安中市教育委員会
- 高橋 誠他 1994『木戸先遺跡』印旛郡市文化財センター
- 高橋泰子他 2002『和田西遺跡』多摩市教育委員会
- 武井則道『南堀貝塚』横浜市ふるさと歴史財団
- 田中和之他 1991『天神前遺跡』蓮田市教育委員会
- 谷口康浩 2004「環状集落の成立過程」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』12集
月夜野町教育委員会 1986『善上遺跡』
- 坪田弘子 2004「縄文時代前期の墓域と土壌墓」『縄文時代』15号 縄文時代文化研究会
- 寺内博之 1984『成田市郷部北遺跡群調査概要(加定地・殿台遺跡)』成田市郷部北遺跡調査会
- 寺門義範他 1993『土気南遺跡群Ⅳ 弥三郎第1遺跡・文六第1遺跡・文六第2遺跡・文六第3遺跡』千葉市文化財調査協会
東京都埋蔵文化財センター 1999『多摩ニュータウン遺跡 No.753遺跡』
- 戸田哲也他 2002『雪ヶ谷貝塚発掘調査報告書』玉川文化財研究所

- 2014『大膳野南貝塚発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 富沢敏弘 1985『中棚遺跡一長井坂城跡』昭和町教育委員会
- 戸村勝司朗 1997「第5章 多田大天下遺跡」『多田遺跡群』香取郡市文化財センター
- 中山豊他 2003『遠藤山崎・遠藤広谷遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 長井正欣他 1997『八城二本杉東遺跡・行田大道北遺跡』
- 西本豊弘編 2009『弥生農耕の起源と東アジア』国立歴史民俗博物館
- 西本豊弘他 1973『古和田台遺跡』船橋市教育委員会
- 西山太郎 2001「縄文時代前期の土壌群一特に千葉県域を中心として」『印旛郡市文化財センター研究紀要』2
- 能城修一・佐々木由香 2014「遺跡出土植物遺体からみた縄文時代の森林資源利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』187集 15-48
- 橋本 淳 2008『大上遺跡Ⅱ一縄文時代～近世編』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 羽鳥政彦・松田光太郎1994『愛宕山遺跡・初室古墳・愛宕遺跡・日向遺跡』富士見村教育委員会
- 福沢仁之他1999「湖沼年縞およびレス」『国立歴史民俗博物館研究報告』81集
- 堀越正行 1988『上台貝塚』市立市川考古博物館
- 前原 豊他 1990『芳賀東部団地遺跡Ⅲ一縄文・中近世編』前橋市教育委員会
- 松田光太郎 1998「東関東における縄文時代前期後半の浅鉢形土器に関する考察」『神奈川考古』34号
- 2002「関東・中部地方における十三菩提式土器の変遷」『神奈川考古』38号
- 2006「縄文時代前期の東京湾における漁撈の様相」『神奈川考古』42号
- 2007「獣面把手の変遷とその地域性」『縄文時代』18号
- 2020『縄文時代前期の広域土器編年とその展望』六一書房
- 2021「縄文時代の竪穴住居址における明褐色系土壌と新期テフラ」『神奈川考古』57号
- 松田富美子他 1997『成田市南羽鳥遺跡群Ⅱ』印旛郡市文化財センター
- 間庭 稔他 1986『三峰神社裏遺跡・大友館址遺跡』月夜野町教育委員会
- 間宮政光 1997『行田梅木平遺跡』
- 安井真也 2015「降下火砕堆積物からみた浅間前掛火山の大規模噴火」『火山』60巻2号
- 山本静男 1982『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 兵崎遺跡・大谷津A遺跡・対馬塚遺跡・大谷津B遺跡・大谷津C遺跡・外山遺跡』茨城県教育財団
- 1984『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書9 仲根台B遺跡・町田遺跡』茨城県教育財団
- 山元孝広他 2005「放射性炭素年代測定による富士火山噴出物の再編年」『火山』50巻2号
- 山本 華他 2018「埼玉県犬塚遺跡の種実圧痕から見た縄文時代前期の利用植物」『古代』142号
- 山本 華・佐々木由香・竹原弘展 2021「レプリカ法とX線透過撮影による土器の種実圧痕の検討」『北区飛鳥山博物館研究報告』23号2
- 和田雄次 1983「新池台遺跡」『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2』茨城県教育財団
- Bond, G., Showers, W., Cheseby, M., Lotti, R., Almasi, P., deMenocal, P., Priore, P., Cullen, H., Hajdas, I., and Boani, G., 1997 "A Pervasive Millennial-Scale Cycle in North Atlantic Holocene and Glacial Climates" Science 278. pp.1257-1266
- Wang, Y., Cheng, H., Edward, R. L., He, Y., Kong, X., An, Z., Wu, J., Kelley, M. J., Dykoshi, C. A. and Li, X. 2005 "The Holocene Asian Monsoon: Links to Solar Changes and North Atlantic Climate" Science 308, pp854-857